

3. 人文学部公開講座「英米の小説と詩」2007年6月6日～2007年8月1日  
高橋 正平 「イギリスロマン派詩人」6月6日～6月20日  
金山 亮太 「チャールズ・ディケンズ」6月27日～7月4日  
平野 幸彦 「エドガー・アラン・ポー」7月11日～7月18日  
岡村 仁一 「メルヴィルとアンダーソン」7月25日～8月1日
  
4. 三条市成人大学講座 2007年6月13日～2007年7月4日  
高橋 正平 「ロマン派詩人ウィリアム・ワーズワースの詩の鑑賞とその意味を探る」6月13日  
金山 亮太 「小説家チャールズ・ディケンズの作風の変化と他の文学者に与えた影響についてなど」6月20日  
平野 幸彦 「エドガー・アラン・ポーの詩「大鴉」の創作の舞台裏」6月27日  
高橋 康浩 「イラク戦争と現代アメリカの政治が直面する諸問題」7月4日
  
5. 「人文超域科目C」（2009年前期木曜5限）でプロジェクトの成果について講義を行った。担当教員は高橋正平，金山亮太，高橋康浩，岡村仁一，平野幸彦，であった。

## <声>とテキスト論

研究代表者 高 木 裕

1. プロジェクトメンバー  
高 木 裕 (代表者)  
先 田 進

|   |   |   |   |
|---|---|---|---|
| 鈴 | 木 | 孝 | 庸 |
| 廣 | 部 | 俊 | 也 |
| 藤 | 石 | 貴 | 代 |
| 佐 | 々 | 木 | 充 |
| 金 | 山 | 亮 | 太 |
| 高 | 橋 | 康 | 浩 |
| 木 | 村 |   | 豊 |
| 金 | 子 | 一 | 郎 |
| 村 | 上 | 吉 | 男 |
| 平 | 野 | 幸 | 彦 |
| 斎 | 藤 | 陽 | 一 |
| 番 | 場 |   | 俊 |
| 橋 | 谷 | 英 | 子 |
| 鈴 | 木 | 正 | 美 |
| 逸 | 見 | 龍 | 生 |
| 高 | 橋 | 正 | 平 |

## 2. プロジェクト概略

身体的な〈声〉の持っている影響力・役割機能を根本から問い直す試みが、現在、さまざまな研究分野においてなされている。ディスコース理論とナラトロジー、発話行為論、テキスト生成論、演劇論、映像論、メディア論、司法論など、〈声〉にアプローチする角度は多岐にわたる。ところで、そこには「言表」「主体」「身体」というタームが分かちがたく絡み合っており、理論的なアプローチによって絡めとることのできない問題が多い。それを丹念に拾い集め、追究し、むしろそれらの問題の所在をあまねく照らし出すことが重要であり、そこに本研究プロジェクトの特色がある。

本プロジェクトは、日本古典文学、ロシア文学、フランス文学、イギリス文学、アメリカ文学、演劇論、映像論とそれぞれ専門分野を異にする研究者からなり、「声とテキスト論」という共通のテーマの下、〈声〉の視点から、さまざま

まな研究分野の問題を考究し、相互に比較・検討した上で、この視点からのアプローチの有効性を検証し、新たに、総合的かつ多面的なテキスト論の構築を目指している。2005年以降、本プロジェクト「声とテキスト論」とボルドー第3大学の研究グループ「モデルニテ」との間で、共同研究の基盤が形成され、その研究成果は、国際シンポジウム、講演会等で公開されている。

### 3. プロジェクトの成果

#### ○2004年度の活動実績

研究会

7月30日 学際交流室

発表者 木村 豊 音声メディアとして見るドイツ初の『飛ぶ瓦版』

「人文科学研究」第116輯への掲載（平成17年3月刊行）。

プロジェクト特集「声とテキスト論」

高木 裕, 「特集にあたって」

高木 裕, 「ボードレールの「七人の老人」について一詩の主体に関する一試論一」

村上吉男, 「デカルト身体論」

鈴木孝庸, 「平家物語における郢曲とそのテキスト」

「表現文化研究」第1号

佐々木 充 「エクリチュールと〈声〉」

#### ○2005年度の活動実績

9月15日 人文学部講演会主催（新潟大学人文学部及び同学部「声とテキスト論」プロジェクト）

講演者 ドミニク・ラバテ Dominique Rabaté（ボルドー第3大学教授）

講演題目：「声の詩学」Les Poétiques de la voix（通訳付き）

コーディネータ：高木 裕

10月21日 プロジェクト研究会

発表者： 佐々木 充

テーマ： 「エクリチュールにおける〈声〉の生成」

10月 日本フランス語フランス文学会2005年度秋期大会

高木 裕 ワークショップ「テキスト論の行方」における発表：抒情詩のテキストと〈声〉

「人文科学研究」第118輯への掲載（平成18年3月刊行）。

プロジェクト特集「声とテキスト論」

高木 裕, 「特集にあたって」

ドミニク・ラバテ「声の詩学」逸見龍生訳

鈴木孝庸, 「平家物語における朗詠テキストと曲節」

廣部 俊也「歌舞伎のせりふと天明期の狂文一声とテキスト」（「人文科学研究」第119輯への掲載（平成18年11月刊行）

## ○2006年度の活動実績

### (1) 講演会

日時 9月14日 14時30分—16時30分

場所 ボルドー第3大学 Salle B 08

発表者 高木 裕

講演 Le Texte poétique et la voix（フランス語）

### (2) 研究発表

「〈声〉とテキスト論」プロジェクトの研究例会

日時 12月8日（金）17時30分—19時

場所 学際交流室（総合教育研究棟3階）

司会 先田進

報告者 鈴木 孝庸

題目 「平家物語における本文と語り」

第2回研究例会は、現社研プロジェクト「表象文化の比較総合的研究」との共催

日時：1月24日（水）18時15分～20時頃まで

場所：総合教育研究棟学際交流室

発表題目：ゲーリー・スナイダーにおける声の問題

発表者：高橋綾子（現社研院生）

(3) 研究成果の公開としての授業

「人文超域科目C テキスト論研究」として、講義（水曜日の3限）を開講した。「声とテキスト論」プロジェクトの教員が参加し、研究分野代表の栗原先生にも加わって頂いた。テキストと＜声＞の関係を中心に、各教員それぞれの領域分野におけるこの問題の特徴をわかりやすく受講生に解説した。

2007年度 高木、栗原、鈴木（孝）、木村、平野、齋藤、城戸

2008年度 高木、栗原、鈴木（孝）、木村、齋藤、城戸

(4) 単著及び紀要論文

1) 単著

鈴木孝庸、『平曲と平家物語』新潟大学人文学部研究叢書2，知泉書院，2007年3月，272+8頁

鈴木正美、『どこにもない言葉を求めて』新大人文選書3，高志書院，2007年3月，188頁

2) 紀要論文の掲載

「人文科学研究」第120輯への掲載（平成19年3月刊行）。

プロジェクト特集「声とテキスト論」

高木 裕，「特集にあたって 一＜声＞の伝統とテキスト」

金山亮太，「ディケンズの公開朗読におけるテキストの問題(1)」

村上吉男，「ヴェーユ身体論」

鈴木孝庸，「平家物語巻第七のテキストと＜曲節＞」

Yutaka TAKAGI, Le Texte poétique et la 'voix'

○2007年度の研究実績

(1) 講演会

国際シンポジウム「声とテキストとまなごしの19世紀」(2007年11月) 19世紀研究所との共催

講師：ボルドー第3大学のエリック・ブノワ教授

講演題目：「声の中の空虚—ボードレール、ヴェルレーヌ、マラルメ—」

(2) 研究会懇話会(2008年2月)

2月に愛媛大学法文学部から牧秀明教授(ドイツ文学)をお招きし、同学部の「多文化社会研究会」の活動について報告をして頂いた。

研究成果の一覧

(1) 図書

高木 裕(他), 『これからの文学研究と思想の地平』, 右文書院, 2007年7月

鈴木 孝庸(他)編, 『平家吟譜—宮崎文庫記念館蔵平家物語—』, 瑞木書房, 2007年

(2) 論文

佐々木 充, 『ハムレット』における想起の技法—ロレンス・オリヴィエ監督・主演の映画『ハムレット』(1948)—, 「英文学会誌」(新潟大学英文学会), 30号, 2007年

番場 俊, スタヴローギンの告白?—『悪霊』論の手前で, ユリイカ, 39巻, 2007年

鈴木 孝庸, 腰越状作文まで, 『中世文学の回廊』(勉誠出版) 小林保治監修, 2008年

「フランス文化研究」第1号

エリック・ブノワ 「声の中の空虚—ボードレール、ヴェルレーヌ、マラルメ—」 逸見龍生訳

○2008年度の活動実績

(1) シンポジウムの共催

第3回国際シンポジウム「19世紀の再評価－19世紀の可能性－」

開催日：2008年10月4日（土）・5日（日）

エリック・ブノワ（ボルドー第三大学／フランス）「フランス19世紀とモデルニテ：自己－評価，低評価，再評価」

ドミニク・ジャラセ（ボルドー第三大学／フランス）「複数の19世紀，諸芸術の再評価とモデルニテの議論」

佐々木充（新潟大学）「『シェイクスピアはロマン派？－19世紀前半におけるシェイクスピア－」

(2) プロジェクト主催シンポジウム

基調講演 工藤進（明治学院大学）「『失われた時を求めて』の〈声〉」

司会 番場 俊

1) 発表者 鈴木孝庸氏（新潟大学人文学部）

「平曲の秘曲におけるテキストと音楽」

2) 発表者 廣部俊也氏（新潟大学人文学部）

「断本と見立遊び」

3) 発表者 先田 進氏（新潟大学人文学部）

「『金閣寺』における見ることと聴くこと」

4) 発表者 佐々木充氏（新潟大学人文学部）

「批評の声と学問の声－小林秀雄と吉川幸次郎」

(3) 「人文科学研究」第122輯への掲載（平成21年3月刊行予定）。

プロジェクト特集「声とテキスト論」

鈴木孝庸 「祇園精舎語りの秘曲性」

廣部 俊也 「行為としての『見立』」

先田 進 「『金閣寺』における《視覚》から《聴覚》への移行」

高木 裕 「ネルヴァルの抒情の探究と〈声〉」

○2009年度の活動実績

(1) 共催イベント

2009年10月 トゥバ共和国から来たホーメイ歌唱グループによるコンサート「Tubaからの風のおくりもの」鈴木正美氏(他)コーディネーター

同12月「金時鐘の新湯：記憶と声」藤石貴代氏(他)コーディネーター

(2) 著書(論文)

馬場英子「舟山の人形芝居—侯家班上演の「李三娘(白兔記)」」61-98頁  
田仲一成・小南一郎・斯波義信編『中国近世文芸論』東方書店2009年12月  
齋藤陽一「身体表現を養う—演劇を通じた授業の試み」89-113頁『空間と形に感応する身体』(栗原隆他編)東北大学出版会 2010年3月25日発行

(3) 講演会

1) 馬場英子「舟山木偶戯演出的即興性—以侯雅飛演的『月唐演義』為例」  
(中国語)華東師範大学対外漢語学院 2009年12月29日

2) 坪井 秀人氏(名古屋大学大学院文学研究科教授)

日時 平成22年2月12日(金)午後2時-3時30分

場所 総合教育研究棟 B棟5階 プレゼンルーム

講演 「近代日本語詩における〈声〉——知里幸恵・李箱その他——」

(4) 刊行書

2010年3月刊行 人文学部研究叢書『声とテキストの射程』高木 裕 編  
執筆者(高木裕, 佐々木充, 鈴木孝庸, 先田進, 番場俊, 金山亮太, 平野幸彦, 石田美紀, 逸見龍生, エリック・ブノワ, ドミニク・ラバテ, 工藤進)

(5) 「人文科学研究」第126輯への掲載(平成22年3月刊行)。

プロジェクト特集「声とテキスト論」

鈴木正美「1920-30年代ソ連のラジオにおける「声」——スターリン体制下のジャズと大衆歌謡」

村上吉男「ヴェーユ身体論〔補V〕(ディドロやカントとの比較)」

鈴木孝庸「當道の『妙音講縁起』—解題と翻字・影印—」



(6) 国際シンポジウム「声とモデルニテ」

会場 ボルドー第3大学

2010年3月15日(月)

開会の辞 Dominique Rabaté: Introduction (Partage des voix: le personnel et l'impersonnel) ドミニク・ラバテ「声の分有 人称と非人称」

Michiru Sasaki: A Modern Voice in Ancient Times? 佐々木充「古代における近代の声?」

Yutaka Takagi: La voix et le sujet lyrique chez Nerval 高木裕「ネルヴァルにおける抒情主体と〈声〉」

Eric Benoit: Dans le plein de la voix (Hugo, Rimbaud, Claudel) エリック・ブノワ「声の充溢 (ユーゴー, ランボー, クローデル)」

Valéry Hugotte: "Que cette lugubre voix se taise" (Lautréamont) ヴァレリー・ユゴット:「あの陰鬱なる声が黙しますように (ロートレアモン)」

Alissa Le Blanc: Eclats de voix: Poésie et polyphonie chez Laforgue アリサル・ブラン:「声の炸裂 ラフォオルグにおけるポエジーと多声」

16日(火)

Tatsuo Hemmi: La pluralité des voix dans *l'Encyclopédie* 逸見龍生「『百科全書』における声の複数性」

Satoshi Bamba: "Modernity and the Condition of Voices in Dostoevsky" 番場俊:「モデルニテとドストエフスキーにおける声の条件」

Makoto Asari: L'instance de la voix chez André Breton アサリ・マコト:「アンドレ・ブルトンにおける声の審級」

Alain Sebbah: La voix de Marguerite Duras et la modernité アラン・セバ:「マルグリット・デュラスの声とモデルニテ」

Takatsune Suzuki: L'Épopée japonaise et la récitation 鈴木孝庸:「日本の叙事詩と語り」及び琵琶の実演